救命救急センター併設病院における血液製剤使用の現状

福山市民病院麻酔科　小野和身

　福山市民病院は、福山・府中及び尾道・三原の備後地区の両二次保健医療圏から岡山県の笠岡・井原地区に及ぶ人口約 90 万人の地域の中核病院で、救命救急センターを併設しているため、三次救急患者も少なくない。当院の血液製剤適正使用に関する問題点としては、新鮮凍結血漿（FFP）の大量使用と、少数ではあるが未だ院内血輸血が実施されている点が挙げられる。FFP の使用は他施設に比べて非常に多く、診療科別では救急科がその 65%を消費している。疾患別では、多発外傷や多臓器不全に対する使用量が多く、凝固因子の補充以外に、循環血液量の補充目的で使用されているものと推定された。当院における多発外傷後の大量輸血患者に対する救命率は高かったが、FFP を早期に大量使用する傾向が認められ、FFP/RCC 比は 1 を越えていた。また、院内血輸血を実施された症例も少数認められたが、その予後は必ずしも良くなかった。これらは、本邦では濃厚フィブリノゲン製剤やクリオプレシピテート等の濃縮凝固因子製剤の入手が困難である点や、福山地区の血液センターでは血小板製剤が必ずしも常備されておらず、広島から供給されるには約 2 時間を要するという地理的な背景に加えて、最後まで救命をあきらめない臨床現場の姿勢を反映しているものと思われた。

【メモ】